

進路情報

令和8年度
第1号

DREAM

岡崎盲学校
進路指導部
編集・発行

【TRY、TRY、TRY します!】

高等部普通科教諭

私は夢を追うことが大好きな DREAM の申し子です! 今回、ひよんなことから DREAM を執筆させていただくこととなりました! よろしくお祈りします!

みなさんは夢、追っていますか? 私は夢を追っていないと枯れ果ててしまう人間なので、常に夢に向かって何かしています! ほぼマグロです!

夢というと壮大に感じるので「目標」に置き換えて話をさせていただきますのでぜひ最後まで読んでください!

私にとっての目標とは、原動力であり生きていく中で必要不可欠なものです。目標があるから挑戦が生まれ、挑戦があるから方法を考え、方法を考えるために研究し、成果を受けて改善する。このサイクルを繰り返していくことで少しずつ確実に成長し、いずれはゴールにたどり着くことが楽しくて仕方がありません。

ゴールにたどり着けなかったとしても挑戦していることや成長を続けることで自己肯定感が向上します。もし、何も目標がなく挑戦のない日々が始まったとしたら私は廃人になってしまうのではないかと恐怖するほどです。ゲンキが元気じゃなくなってしまいます。

私の岡盲に来てからとこれからの目標(予定)を少し皆さんにお伝えしたいと思います。

①筋トレはこれまでどおり頑張り、筋肉のカットが出ている体を実現させる。②フロアバレーボールで日本一になる。現在は2位まで迫ることができましたので R8年、R9年までには実現する。③何か新しい競技に挑戦し、行けるところまで行く。今考えているのはコーフボールと言うバスケットボールに似た競技を始め入賞すること。④何かの楽器をある程度の実力にする。⑤跳んだり走ったりが辛くなってきたらモルックのような動かない



競技を始め、行けるところまで行く。小さいものも含めるとまだまだたくさんありますが、尽きることがなさそうなくらい目標を秘めています。中高生時代からこれだけの目標をもって主体的に挑戦できていたらと考えると過ぎた時間が非常に惜しまれます。

私は、大小問わず目標をもって挑戦することが大切だと考えています。ときには少し頑張れば手が届きそうな目標でもよいと思います。ゴールは自分の生活スタイルに合わせたものを設定し、気持ちに余裕のある状態を維持



しながら挑戦することが大切だと思います。私自身、今の元気さを維持しているのは目標や挑戦をし続けているからだと確信しています！

今、何も目標をもっていないと思った方！ 小さいことから始めてみてはどうでしょうか？ 生活が少しだけ豊かになるかもしれません！

【 宝 島 】

高等部理療科教諭

新入生のみなさん、岡崎盲学校には慣れましたか。この「宝島」は、私が現在の進路を選ぶまでの長い長い道のりを書き記したコーナーです。幼い頃に視覚障がい者となり、幼小中高等部と盲学校で学び、現在の盲学校勤務となるまでのさまざまな体験や、その体験を通して感じた気持ちを正直につづっています。「これまでの宝島も読んでみたい」と思われた方は、担任の先生または進路指導部の先生にお問い合わせください。

前回の宝島では専攻科でスポーツトレーナーに興味をもち、その分野への進路を求めてアントニオ猪木さんを訪問した内容でした。今回はその続きと思われる方もいるかもしれませんが、新しい年度が始まったことも考えて、視覚障がい者が新しい環境に慣れるための知恵について書いてみたいと思います。

■視覚以外の感覚を駆使しよう（番外編）

私たち視覚障がい者にとって、視覚による情報が得られにくいことは当たり前のことであり、それによる様々な不自由があります。しかし、人間にはそれ以外の感覚も備わっており、普段はあまり意識しないことが多いと思います。「花粉症で鼻が詰まって、匂いがわからない」「コロナなどの感染症になり、味を感じなくなったことがある」、「ノイズキャンセリングのイヤホンを使っていて、周囲からの呼びかけに反応できなかった」など、特定の条件の環境に置かれたときに視覚以外の感覚を意識することになります。もちろん、私たち人間は日常生活の中で、これらの感覚を使っていますが、強く意識しているかどうかは別問題です。そしてそれらの感覚を有効に意識して活用することが重要だと思います。



「名前と顔が一致しない」、新年度はこんなことが話題になります。では、視覚障がい者の私たちにとっては、「何と名前が一致しない」という言い方になるのでしょうか。姿や顔で人を認識するのが一般的だと思われませんが、私たち視覚障がい者は、声や歩く音、匂いやフォームからの雰囲気人で認識していると思います。では、例を挙げてみましょう。

“THE・シューズ”という足音の先生は誰でしょう。中学部のU先生、高等部のM先生がまず挙げられますね。次に歩く速度が速い先生は誰でしょう。校長先生と高等部のK先生、中学部のS先生ですね。K先生はスポーツマンで本校のマッスルマンなので大股でかかとかから足をついて歩く印象がありますが、意外とすり足なんですよね。S先生は歩く速度が速く、サンダルを履いているのが特徴的です。次に“THE・サンダル”という足音はどの先生でしょうか。小学部のN先生、中学部のF先生、高等部のY先生ですね。高等部のY先生のサンダルは床からサンダルが離れるときに小さな音が出ますね。他にも特徴的なのは、高等部のW先生や小学部のK先生が分かりやすいですね。他にも特徴的な足音の先生がいたら教えてください。

次に弱視の方にとって見分けが付きにくい、同じようなフォームをした人は誰でしょう。体格がよく似ている、髪型がよく似ている、これらは雰囲気が似ていると表現されますね。そこによく似た色の服を着ていたり、メガネやサングラスをしていたりすると、より見分けがつかなくなりますね。特に遠くから見た場合に見分けがつかずに呼びかけてしまうと、恥ずかしい思いをすることもありますね。このように、足音で人を認識したり、雰囲気が似ていることで見分けが付きにくかったり、視覚障がい者特有の認識方法や間違えやすい「あるある」などがありますね。しかし視覚障がいの有無に関わらず、自分から積極的に挨拶することは社会生活を送る上では大切なことです。「こんにちは」と自分から挨拶をすれば、相手からも「こんにちは」と声が返ってきます。その声で確実に誰かが分かりますので、積極的に自分から挨拶することをお勧めします。



【職場体験では褒められたはずなのに…】

進路指導主事

中学部の〈チャレンジ体験〉や、高等部の〈産業現場等における実習〉など、校外で行う職場体験の場において、頑張ったことやできたことを中心に、生徒本人や保護者の方に事業所の職員さんからポジティブな言葉をたくさんいただきます。職場での努力を認め、生徒の気持ちを大切にしようとする配慮から、前向きな言葉をたくさんかけていただくことは決して珍しいことではありません。



しかし、その一方で、担任や進路指導担当の教員には、良い部分も不十分な部分も併せて現実的な評価が伝えられます。例えば、「作業そのものはできるが、準備や片付けは職員が行わなければならない」、「手先は器用だが、継続性に欠ける」、「頑張る気持ちは評価できるが、焦ってミスをした際のフォローが自分ではできない」、「素直だが、指示を待つ場面が多く、積極性に課題がある」…など、採用可否に関わる具体的な指摘が共有されます。そのため、場合によっては「実習中は褒められたのに不採用だった」という状況が生まれることがあります。

事業所からのネガティブな評価が、職場体験の中で生徒や保護者に直接伝えられなかった場合は、その後の進路相談等において教員が正しくお伝えすることになります。しかし、実習先からの温かい言葉とは異なる評価

を耳にすることで、生徒・保護者からみると、特に進路指導担当の教員は“冷酷な言葉を放つ 心ない人間”として映ることがあります。しかし、どの生徒も懸命に活動している姿を見ているからこそ、胸が締め付けられる思いを抱えながら、心の中で涙を流して応援の気持ちをお伝えしています。そんな心情も汲み取っていただければ幸いです。



それでも、学校以外の第三者からの率直な評価が聞けることは、実は非常に貴重で有意義なことでもあります。厳しい意見についても、決して生徒を否定するためのものではなく、これから社会の中でよりよく活動する・働くために必要な視点を教えてくれるものなのです。そこで大切なことは、感情的に「嫌な事業所だ」、「理解がない」、「視覚障がいへの支援が不十分」などと受け止めて終わりにするのではなく、「では、どうすれば良くなるのか?」と前向きに考える姿勢だと考えています。進路変更も含め、この視点をもつことで、その体験は単なる結果ではなく、成長のための大きなステップへと変わります。

中学部の〈チャレンジ体験〉や、高等部の〈産業現場等における実習〉は、生徒が社会で自立していくための準備段階の活動です。事業所からいただく評価も、生徒が成長していく上で大切な学習の一つになります。「できたこと」と「足りなかったこと」の双方を振り返り、次の行動につなげていくことこそが、本当の意味での職場体験の成果といえます。その経験を、未来につなげる大切な学びとして生かして欲しいと思います。